

秋山虔・木村正中・清水好子 編

講座
源氏物語の世界

第八集
橋姫巻～宿木巻

有斐閣

虔・木村正中・清水好子編

有斐閣

源氏物語の世界

第八集

橘姫巻と宿木巻

編 者 紹 介

あき やま ゆん
秋 山 虔 (東京大学文学部教授)

き むら まさ のり
木 村 正 中 (学習院大学文学部教授)

し みづ よし こ
清 水 好 子 (関西大学文学部教授)

講座 源氏物語の世界〈第八集〉

昭和58年6月15日 初版第1刷印刷

昭和58年6月25日 初版第1刷発行

定価 2,100 円

秋 山 虔
編 者 木 村 正 中
清 水 好 子

発 行 者 江 草 忠 允

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町2~17

電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷 株式会社 精興社・製本 株式会社 高陽堂

© 1983, 秋山虔・木村正中・清水好子. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-07108-X

はしがき

『源氏物語』は、『万葉集』と並んで、日本人の心の中に、永く生きつづけ、近代の文学にも大きな影響を与えている古典中の古典である。まさに日本人の心の故郷ともいふべき世界がここにある。

さて、その『源氏物語』の研究も、平安時代以来長い伝統をもち、その積み重ねの上に、今日では多彩をきわめており、なお、つねに新しい課題が取り出されて、尽きることがない。すなわち、成立論・構想論、あるいは作品成立の歴史的背景の解明や準拠論、作品の内在的展開に重点を置いた主題論・構造論、さらに表現論・文体論、とくに「語り」や草子地の問題、また作品に内包される諸種の思想の追究、王権論・神話的構造論など。それは、この作品がもつ無尽蔵の内在的意義と、複雑な機構とを考えれば当然であろう。

一方、このような作品総体を対象とする研究とともに、注釈的研究の発展も著しい。注釈的研究は、もはや単なる平板な訓詁の学で終わることができない段階に達しており、叙述に正確に即しながら、個々の部分に内蔵される文学的意味を明らかにしていく方法が要請されているのである。こうした、各巻の内部からの問題点の把握が、作品の総体的な考究と深くかわりあっていることはいうまでもない。つまり、『源氏物語』の個々の局面の「読み」の中から導き出された視点を、作品総体との連関において確認し、それによって『源氏物語』の展開をいっそう明確に跡づける、——こうした反復作業が『源氏物語』の理解をさらに深めていくわけである。『源氏物語』を「読む」とは、要するに、

さまざまな視点からの作品分析を相互に媒介させながら、いま読みつつある部分に内在する特有な作品論的意義を具体的に明らかにし、『源氏物語』の本質に近づいていくということなのであろう。

この『講座 源氏物語の世界』は、右のような『源氏物語』の「読み」を実現したものである。巻の順序に一応従い、その巻をめぐって存在する主な「テーマ」を取り出した。それらは、巻固有の場面的ないし巻論的な方向、他の巻と密接に関連していく構想論的方向、時には全体にかかわる美意識の問題などの考究として、また物語に外在する背景的な諸要件をその基盤として捉えることによって問題を明らかにしていく方向へと、それぞれの「テーマ」の性格に応じた方法をもって究明されている。これらの「テーマ」の追求が、『源氏物語』とは何かの問いにこたえ、さらに、この物語を読むための具体的な手がかりともなれば、まことに幸いである。

なお、「テーマ」は、従来の研究の達成の中から、編者三人が設定し、それにもとづいて、数多くの執筆者に自由に論究していただいた。また、各集には、『源氏物語』に深い関心をもっておられる方々に、より広い角度からのエッセイを寄せていただいた。これらの方々の御協力に深く感謝する次第である。また、いろいろとお世話になった有斐閣編集部、澤井洋紀・林喜代子両氏に厚く感謝の意を表したい。

編者 秋山 虔

木村 正中

清水 好子

執筆者紹介（執筆順）

坂	本	和	子	
いし	はら	しょう	へい	
石	原	昭	平	帝京大学文学部助教授
いま	い	げん	え	
今	井	源	衛	梅光女学院大学文学部教授
しの	はら	しょう	じ	
篠	原	昭	二	東京大学教養学部教授
ひ	なた	かず	まさ	
日	向	一	雅	東京女子大学短期大学部助教授
し	みず	よし	こ	
清	水	好	子	関西大学文学部教授
ふじ	むら	きよし	潔	
藤	村	潔		藤女子大学文学部教授
おし	やま	しげ	お	
鷺	山	茂	雄	静岡女子大学文学部助教授
たか	はし	とある	亨	
高	橋	亨		名古屋大学教養部助教授
えの	もと	まさ	ずみ	
榎	本	正	純	武庫川女子大学文学部助教授
ます	だ	しげ	お	
増	田	繁	夫	大阪市立大学文学部助教授
なか	の	こう	いち	
中	野	幸	一	早稲田大学教育学部教授
よし	おか	ひろし	曠	
吉	岡	曠		学習院大学文学部教授
ほそ	の			
細	野	は	る	み
はら	おか	ふみ	こ	
原	岡	文	子	明治大学短期大学講師
すず	き	ひ	で	お
鈴	木	日	出	男
ふじ	い	さだ	かず	
藤	井	貞	和	共立女子短期大学講師
				成城大学文芸学部教授
				東京学芸大学教育学部助教授

目次

〔橋姫巻〕

1 八の宮

坂本 和子 1

「ふる宮」の過去 不遇な日々 北の方の死と再婚拒否
「八の宮」登場の意義 「俗ながら、聖」の生活

〔橋姫巻〕

2 宇治の伝承

石原 昭平 14

宇治と菟道稚郎子 八の宮と菟道稚郎子 待つ女、橋姫

〔橋姫巻〕

3 宇治の山里

今井 源衛 33

交通・戦略の要衝 入水の伝承 「宇治別業」と「宇治院」 宇治の荘園

〔橋姫巻〕

4 道心と恋——薫論(2)

篠原 昭二 52

恋の始まり 世の物語と恋人 薫の道心 法の友 薫の恋

〔橋姫巻〕

5 柏木の遺文

日向一雅 75

はじめ小侍徒が秘密を告げた 証拠の文殻 秘密を明らかにしたことの意味 大君へ
の恋と道心 弁の君の役割 道心の評価をめぐって

〔椎本巻〕

6 宇治の中宿り——作中人物の歌

清水好子 85

匂宮と薫 川を渡る楽の音 宇治の春景 風と波 饗応の宴 おなじ挿頭

〔椎本巻〕

7 八の宮の遺言

藤村 潔 100

桐壺院の皇子たち 柏木の最後の手紙 琴を弾く姉妹と弁 八の宮の死 巢守の君
竹河巻の「宇治の姫君」 総角巻の薫 夢に見えぬ八の宮 故郷離るる中の君

〔総角巻〕

8 大君思慕——薫論(3)

鷺山茂雄 118

薫の魅力(1)——読者の評価 薫の魅力(2)——用意平均、莫由好悪 薫の求婚 大君の

魅力(1) 大君の魅力(2) 薫の恋 隔てなき語らい 契り得ぬ仲 大君思慕の物語
の意味するもの

〔総角巻〕

9 大君の結婚拒否

現実の否定 昔物語の彼方へ 橋姫のイメージ 恋物語の再始発 忌みの恋 遺
言の解釈と自縛 恐ろしき神 愛と死、現実と罪と

高橋 亨

137

〔総角巻〕

10 匂宮と中の君

前提 匂宮像をめぐって 中の君の結婚と大君 匂宮と中の君 宇治中の君と作者
中の君の結婚と薫

榎本 正純

158

〔総角巻〕

11 大君の死

後見という男女関係 新しい男女関係としての薫と大君 いわゆる「結婚拒否」につい
て 大君の決意 肉体と精神 死による完結

増田 繁夫

178

12 弁の君と女房たち

中野 幸一

197

秘密を知る女 弁の君の経歴 弁の君の年齢 弁の君と小侍従 弁の君の役割
弁の君の存在意義

〔早蕨巻〕

13 中の君の都移り

構想論上の問題 浮舟物語構想の成立時期 早蕨巻の明るい雰囲気 早蕨巻の悲劇へ
の予感 旧中の君物語の輪郭 年立の混乱

吉岡 曠

210

〔宿木巻〕

14 女二の宮の縁談

在位中の皇女の降嫁 宿木巻の位置 起筆について 藤壺女御・藤花の宴 女二の
宮の降嫁と薫 女二の宮の縁談が描こうとしたもの

細野はるみ

231

〔宿木巻〕

15 幸い人中の君

「幸ひ」「幸ひ人」 幸い人中の君の物語 中の君の嘆き——匂宮と六の君との結婚をめ
ぐって 朝顔の花——中の君の境涯 幸い人の嘆き——明石の君と紫の上 中の君の
外側 「幸ひ」へ——薫の思慕とその行方 女房と語り手と 再び「幸ひ」「幸ひ人」
結び

原岡 文子

244

〔宿木卷〕

16 栄華と憂愁——薫論(4)

鈴木日出男

263

女二の宮降嫁

宿木巻頭

薫における都と宇治

薫の栄華と憂愁

〔宿木巻〕

17 形代浮舟

藤井貞和

276

胸中を訴える薫

「人形」の意味複合

大君の魂の問題

すがたをあらわす浮舟

『講座 源氏物語の世界』(全九集) 総目次〔巻末〕

凡例

- (一) 『源氏物語』の原文引用のテキストは特定せず、各執筆者の判断によっています。なお、漢字、仮名づかい、句読点等で、必ずしもテキスト通りでないばあいがあります。
- (二) 主なテキストの略号は次のとおりです。
 - 『全集』——日本古典文学全集（阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳、小学館）
 - 『全書』——日本古典全書（池田亀鑑校註、朝日新聞社、現行版による）
 - 『大系』——日本古典文学大系（山岸徳平校注、岩波書店）
 - 『集成』——新潮日本古典集成（石田穰二・清水好子校注、新潮社、刊行中）
- (三) 各章（「テーマ」）で使用したテキストは、章ごとに記してあります。
- (四) 原文の漢字は、原則として新字体によっています。
- (五) 原文のふり仮名は、歴史的仮名づかいになっています。
- (六) 原文中の「」内は、当該の章の執筆者による補注です。
- (七) 各章のタイトル脇に、『源氏物語』の当該の巻名を付しました。巻名のない章は、『源氏物語』中のいくつかの巻にわたる「テーマ」、または、美意識の問題等、全巻にかかわる「テーマ」です。

1 八の宮

坂本 和子



「ふる宮」の過去

八の宮は橋姫巻の巻頭において紹介される。「その頃、世にかずまへられ給はぬふる宮おはしけり」(『大系』(4)二九七頁。以下、原文引用は『大系』による)の一文は、これまで物語の中に活躍してきたどの人物とも異なった、新しい型の登場人物を、いかにも端的に印象づける。宮という高貴の生まれでありながら、世間に人並に取り扱われていない人物を設定しての新たな物語の展開は、従前とは異なる趣を呈していくであろう。続いてこの「ふる宮」の半生が述べられる。母方も「やむごとなく物し給」(二九七頁)うたというのであるから、女御で大臣の女。「すぢ異なるべきおほえなど、おはしける」というのであるから、皇太子にも立つ可能性のある親王であった。北の方にも大臣の女を迎え、生い立ち華やかであったのに、時が移り、権勢とは無縁の存在になって世に忘れられていったので

ある。宮には登場の時点で既にその人生の大半を過去のものとした人格が与えられているのであり、宮の半生の解説は宮の人格を理解するための資料として読まれるべきであろう。

宮は、桐壺院の皇子で源氏の弟、冷泉院の兄、八の宮とされた。一院の皇子とするより、先帝の皇子とするより、朱雀院の皇子とするより、年齢的にも、また何より「世にかずまへられ給はぬ」状況設定のために、桐壺院の八の宮とするのは適当であった。

朱雀院の御代、弘徽殿太后は東宮の廢立を計り、東宮位には八の宮をと考えた。その頃、宮は父院のみならず母女御とも死別するという不幸な境遇にあったが、外戚や外舅の存在を考慮すれば、宮は坊がねとして相応しい条件を備えていた。太后は宮を「世の中に立ちつぎ給ふべく」、「もてかしづいた（三〇三頁）。これが順調に進行したのなら、八の宮の将来は無限に輝いたことであつたらう。しかし、冷泉院は桐壺院の定めた東宮であり、故院の遺志を遵奉する帝によって太后の企ては成功しなかった。のみならず、朱雀院が讓位し冷泉院が即位した時、皇太子に立ったのは朱雀院の皇子であった。この新東宮は二歳である。もはや、八の宮が立坊する余地などどこにもない。加えて、太后の策謀に迎合した人びとは、冷泉院やその後見役たる源氏の政治的・社会的生命を脅かしたのであったから、彼等が新たな時勢に適應していくために八の宮から遠ざかったのもやむを得ない。

ところで、冷泉院の御代の樹立と充実は、源氏の功績である。また、今上の御代、皇太子は明石姫君腹の第一皇子である。その立坊にもなって、後見たる夕霧は大納言兼左大将に昇進した。執政の任には帝の外戚鬚黒が当たたる。彼は尚侍玉鬘を嫡妻とする源氏の女婿である。このような、宮の側か

らみて「いよく、かの御次くになり果てぬる世」(三〇三頁)という時勢下において、宮が「あなたさまの御なからひには、さし放たれ」、世間からは「はしたなめられ給ひける」(二九七頁)状態となつてしまつたのは当然である。

昔、桐壺院が源氏を臣籍に下したのは、「親王となりたまひなば、世のうたがひ負ひ給ひぬべく物し給」(桐壺、(I)四五頁)う点を憂慮し、かつ「無品親王の、外戚のよせなきにてはたゞよはさじ」、「わが御世もいと定めなきを」(同、四四頁)との考えのもととの決断であつた。源氏は父院の思惑通り、「たゞ人」の人生を生きた。すなわち、「おほやけの御後見」としての身分を確実なものとし、さらに准太上天皇の待遇を受けるまでになつた。源氏に比して、八の宮は「親王」としての人生を生きる。宮は「親王」となり、「すぢ異なる」とみえるほどの名声を得た。しかしそれがかえつて時勢の変化とともに「世のうたがひ」を負ふこととなり、遂に「無品親王の、外戚のよせなき」に近似した状態を招き、世に「たゞよ」う如き境遇におちいつた。源氏が親王になつた場合のこととして桐壺院が懸念したところの生涯を、八の宮は生きることになつたと言えようか。

不遇な日々

冷泉院即位後の日々を、社会的に疎外された八の宮が何を支えとしてどのように生きたか。通常人間の活動はその属する社会と家庭とにおいてなされる。世間に無視されるが如き境遇の宮には、親王としての生活が充分にできない以上、社会から離脱する以外に生きる道はない。現実にも、菅原道真の件に関係して出家した斉世親王の例もある。しかし、宮は出家しなかつた。社会的に疎外されなが

らも、家庭生活に「憂き世の慰め」(二九七頁)を見出したのである。そこで宮の精神を支えたのは、管弦への興味と北の方との愛情生活であった。

宮は父桐壺院、母女御とはともに早く死別し、後見役たる人物も時勢の変化に従って身辺から遠のいてしまい、邸内にも有能な家司・世話役が仕えていたわけではない。したがって、宮が親王として習うべき学問も充分に修得せぬままに成人したのはやむを得なかった。まして、ただ人のように世の中を渡っていく心構えなど知るべくもない。伝来の「古き世の御宝物」(三〇二―三頁)や外祖父の遺産もいつの間にか人手に渡り、広い邸と調度類のみが宮のものとして残された。宮の生活状況は、正篇の末摘花を想起させる。もともと八の宮の邸は、源氏が訪問した折の故常陸宮邸ほど荒れてはいなかったが。末摘花が七弦琴を弾く王族の女であったと同様、八の宮も琴の琴を得意としていた。琴の貴重なることは、若菜下巻で源氏が「琴なむ、猶、わづらはしく、手触れにくき物はありける」(③三五頁)、「琴の音を離れては、なに事をか、もの調へ知るしるべとはせむ」(同、三五二頁)などと述べていて明らかである。帝王たる朱雀院も准太上天皇の源氏もこの琴をよく弹奏し得たのであったし、源氏は朱雀院の要請によって女三の宮にその奏法を伝授した。女樂の夜、源氏はまた、琴の奏法は軽しく伝えてはならないものであり、かつ伝えるには相応な人物に伝授されるべき旨を語っている。八の宮は、「高き人ときこゆるなかにも、あさましうあてに、おほどかなる」(三〇二頁)親王に相應しく七弦琴に秀でていたということなのであらう。宮にとって琴は、彼の人格を形成する教養の一端として主要なものであった。

宮の傍らには、宮を支える北の方の存在があった。北の方は八の宮の立場、さらには即位の可能性を見込んだ親の期待に従って結婚した。この結婚は時の帝の生母弘徽殿太后にも好意を以て迎えられたはずである。とすれば、八の宮と北の方との結婚は、当時大方の祝福を受けた輝かしいものであったであろう。しかし、時の流れは北の方にとっても意外な進展を呈した。彼女は時勢と人心の変化に心細さと悲しみを嘗め尽くした。父の邸ではなく宮家で生活する北の方が、宮との結婚生活を唯一の頼り所、「憂き世の慰め」としたのは当然である。宮も己れとの結婚を契機として運命を共有する北の方に、己れの現実と過去の誉れとを見出すのは自然であろう。社会的には恵まれないながらも、宮も北の方も互いに「またなく頼みかはし給へり」(二九七頁)とある如く、愛情生活の面では充足した日々を送ることができた。北の方との愛情生活と琴を中心とする管弦の方面の充実と、不遇な宮も私生活においては風雅な親王であった。宮にとって物足りないことといえば、北の方に御子が誕生しないことであつたが、ともかくも二〇年に近い歳月を北の方とともに平穩に過すことができたのである。

北の方の死と再婚拒否

待望の御子が生まれたが、北の方は中の君を産むのとひきかえにこの世を去る。北の方との愛情生活に依存していただけに宮の衝撃は大きく、私生活の破綻が自覚されたばかりでなく、生きていく希望も失われた。誕生したばかりの君への配慮など及ぶはずもない。

しかし、宮家に仕える人びとには、北の方の死がむしろ好機とみえた。彼等は宮に再婚を進言する。